

# イスラエル アグリテック2003レポート

## 第1回 受け継がれる開拓精神



9月16日から21日にかけて、国際農業展示会アグリテック2003への参加のため、イスラエルを訪問してきた。この機会に、レバノン国境に接する最北部からエジプト国境に近い南部、西に面するヨルダン国境近郊まで、イスラエル農業の様々な局面を垣間見ることができた。イスラエルは極度の高温、乾燥、夜間の冷え込み、水不足、砂地の痩せた土地柄など、作物生産条件において決して恵まれた環境とはいえないところが大半をしめている。イスラエル農業を誇る際、そういう条件だからこそ点滴灌漑技術をはじめとした先端技術が生まれた経緯について語られることが多い。しかし、筆者が見てき

た技術とは、イスラエルの農業経営者が、自ら選んだマーケットで競争に勝ち続けるためだけに産官学が共同して創り上げてきたツールに過ぎなかった。ガリラヤ湖の北側で果樹栽培を営む20代後半の経営者ニール・クロズマンはいう。「自分の名を傷つけるような商品は何があるかが絶対出荷しない。すべての農作業、技術、管理はその確率を減らすためにあると思っている。世界中にいるお客さんを1度でも落胆させることは許されないからね。技術への驕りではなく、顧客を通して見出す自負心、これが彼らの農業経営を支える原理原則である。

(編集部 浅川芳裕)

アグリテックの歴史は意外に古く、じまりは1979年である。数年に1回のペースで開催され、今回で15回目を迎える。イスラエルの農業関連メーカーにとっては、新商品を国内に向けてだけでなく、海外からのバイヤーに向けてアピールできる絶好の機会である。事実、イスラエルが世界に誇る灌漑技術を発表してきたのもこの展示会である。

日本の農業関係者の中でも知る人ぞ知る展示会で、前回99年には日本から本誌編集部ツアーを含め、200名以上が参加した。今回は、開催時期に不安定な政治情勢が重なったためか、展示会場を回った限り、日本からの参加者には一人も出会わなかった。主催者に聞いたところ、集計してみないと分からないが、日本からのバイザーは事前登録でさえもほとんどいなかったという。

しかし、他国の農業関係者の反応は全く違っていた。韓国、オーストラリア、イタリア、ブラジルをはじめ38ヶ国の農業大臣が、オープニングパーティーに来賓として出席していた。ドミニカ共和国からは、大統領が訪れていた。インドからは、各州の農業大臣が農業関連メーカーを引き連れてやってきていた。

中国の勢いは更に凄まじかった。特に黒龍江省の有機農産物販売会社が1500㎡のブースを借り切り、農産物輸出用イスラエルのバイヤーに向けて中国有機農

産物売り込んでいたのは驚きだった。農業資材の展示会のため、ほとんどバイヤーはおらずブースは閑散としていたのだが、売ることが目的というよりは、中国農産物の品質の高さを世界の農業関連業界人に誇示することが狙いなのかも知れない。また、両政府間の取り組みとして、イスラエルの灌漑技術・資材が積極的に中国(特に黒龍江省)に導入されていることから、パートナーシップを示す好機であったのだろう。事実、イスラエルの農業大臣と中国からの出展企業・視察団は長時間に渡り面談していた。

出展企業数は、前回並の250社超で、来場者数は本稿執筆時(19日)では集計が終わっていないが、主催者側の話では前回並だという。不安定な政治情勢に関わりなく、世界各国の農業関係人を集め、着実にビジネスにしていこうとするイスラエルのアグリビジネスの魅力と凄まじさはどこにあるのか、探ってみよう。

### ●ハイテク農業展示会に現れた クワシック・トラクタ

会場にきて最初に目を引いたのは、意外にもクワシック・トラクタの展示だった。野外展示してあるトラクタの総数は70を越える。古くは1920年のMcCormick Deeringから、1968年のOliver2150まで、使い込まれながらも丁寧に修理された様子が伺えるコレクショ

ンからは、展示主催者の心意気が伝わってくる。展示会の主旨である最先端の農業技術・資材の紹介から見れば場違いではあるが、開催期間を通じて老若男女を問わず一定の人だかりができていた。どんな背景でハイテク農業展にクラシック・トラクタを展示しているのか、主催代表者らしい恰幅のよい老紳士を見つけて話を聞いてみた。

**筆者**：どうして各メーカーの最新商品が並ぶ展示会で、クラシック・トラクタを展示しているのですか。

**代表者**：もともとは個人的なコレクションとして、古いトラクタ、プラウ、ハロー、ディガなど1000台以上を収集してきました。仲間と一緒にトラクタ収集協会を作ったのは2年ほど前です。収集していくうちに、このコレクションは私達が耕してきたイスラエルの地での「農業と機械化」の歴史そのものであることに気付きました。特に、最近の若い農家に「耕すこと」の意味をもっと深く知ってもらいたいと考え展示しています。あとは、協会の主旨に賛同してくれる仲間を増やすこと、できたら今まで見つけられなかったトラクタを寄贈してくれる人と巡り会えればいいですね。

**筆者**：日本でもそんなのですが、イスラエルでもトラクタの大型化と「深耕が伴っていない」ということですか。また、協会の主旨を教えてください。



農場開拓時代について旧友と語り合うミシュテイン氏。後ろに見えるのは、1952年モデルのドイツLANZ社製ALLDOG（会に賛同したイッディドヤ氏贈呈）



Styer 1948年モデル。車輪は鉄製。ミシュテイン氏が収集を開始して以来、初めて修復したトラクタ。

**代表者**：最近の若者は、耕すことよりトラクタのキャビン内のエアコンやステレオの性能や、携帯電話やインターネットとのコネクションの方を気にしている。プラウにはあまり関心がないようです。イスラエルにも、地元の土質に合うように改良されたプラウがありますが、メーカーはプラウ製造に熱心ではありません。協会の構想は、このコレクションをベースに、一つは「耕すこと」によって国土を回復したユダヤ民族の歴史博物館にすること、もう一つは「このイスラエルの地にやってきた過去の世代が、耕すことを通じて養ってきた開拓精神を次世代に受け継ぐこと」です。

をど費やす風潮を批判的に見ながらも、自らをしつかりとネットでPRしている。代表者の名前は、エレット・ミシュテイン氏。祖父が1928年にロシアから移住してきたから三代目の農場主。イスラエルでは珍しく完全に独立経営である。8haの農地で作期の違いを利用して、8haの農地があるように、切花、柑橘類、トマトを栽培している。メンバーは毎週金曜にイスラエル中から集い、鉄加工・機械工・電機技師など各自専門分野を活かして修復作業にとりかかる。メンバーに聞くと、皆ミシュテイン氏の人柄と情熱に引き寄せられていつの間にか集まりはじめたそう。

設立の趣意書は、ホームページにあるのを見て欲しいとのこと。協会メンバーの平均年齢は60代後半である。若者が農業より携帯電話やインターネットに時間

しないうちに、彼は自分のコレクションのすべてを博物館設立用の仮の格納庫に移動させた。作業を終えたカツツ氏は、「ヒーカップを片手にミシュテイン氏にこう語ったという。」「この仕事はやり遂げなければならない」と。こうして2人の同盟により協会が立ち上がった。

展示会初日の見学を終え、ホテルに戻る。ミシュテイン氏が教えてくれたホームページを開いてみた。トップページに記されたのは、パール・カツエネルソン（註）からの引用だった。

創造的な新世代は、過去の世代から受継げられてきた情報を捨てはしない。新世代は、その情報を吟味し試金石とし、時に拒絶し時に受け入れ、そして時には既存の伝統に新たな伝統を付与する。時として、その新たな伝統によって忘れ去られた事柄が掘り起こされ、次世代の精神の滋養となるのである。

1938年、テルアビブ市にて

（註）イスラエル建国活動家の一人として今でもイスラエル国民の尊敬を集める。白ロシアポプリンスク生まれ、1909年にパレスチナに移住し、シオニズム労働運動を指揮、労働者向けの新聞を主幹し、労働階級にのつての精神的支柱となる言論活動を行う。ホロコースト下のナチス・ドイツで生存ユダヤ人の救出・移住運動をしたことでも有名。1944年、イスラエル建国（1948年）を見ることなく死去。